

Movie Review 6 # 落下の解剖学

『# 落下の解剖学』（ジュスティーン・トリエ監督）をamazon prime videoで視聴した。3連休で久しぶりに読書の時間を映画鑑賞に振り替えた。

本作は2023年カンヌ国際映画祭コンペティション部門で女性監督による史上3作目のカンヌ国際映画祭パルムドール受賞作。重要な脇役である少年の愛犬もパルムドッグ賞を受賞した。本国フランスでは、5週目には観客動員数100万人を超える大ヒットを記録。日本では2024年2月23日に公開された。

雪山の山荘で男性が3階から落下して死亡した（後に不可解な転落死扱いとなる）。視覚障害をもつ11歳の少年だけがそこに居合わせた。父親はすでに息絶えていた。その死には不審な点も多く、前日に夫婦喧嘩（ドイツ人作家の妻Sとフランス人男性教師）をしていたことなどから、妻Sに夫殺しの疑いがかけられる。息子に対して必死に自らの無罪を主張するSだったが、事件の真相が明らかになっていくなかで、仲むつまじいと思われていた家族像とは裏腹の、夫婦間に隠された秘密や嘘が露わになっていく。どんな家族にも人には言えないし、触られたくない秘密があるのだ。最後に、息子が証言する。母親Sに有利な発言が飛び出すのか、それとも・・・

Sは裁判で無罪を勝ち取ることができるのか。

本作は2007年のイタリアで若い米国人女性らがルームメイト殺害の容疑で起訴された事件（無罪→有罪、最終的に無罪）から発想を得たようだ。妻役俳優の有罪なのか無罪なのかを繰り返し監督に尋ねたが、教えられないまま撮影が続けられたという（そのためか観客も宙づりの心理に陥る）。夫婦の会話は、フランス語でもドイツ語でもなく、二人が話せる共通言語である英語でなされる。監督は「言語」が重要なテーマだと考えたようだ。「Sが英語を話し、フランス語を話そうと挑戦しているドイツ人であるという事実が、多くの仮面を作り出し、問題を曖昧にし、彼女が何者なのかさらなる混乱を生み出す。」と。私の英語もほとんど意味をなさない。

階段から落下する映画といえば

『鎌田行進曲』

「39段の階段落ち」のくだりは、日本映画史に残る名シーン、深作欣二監督作品。

『戦艦ポチョムキン』

ウクライナのオデッサにある巨大な階段から乳母車が落ちる。それを見つめる夫人の驚愕する顔。エイゼンシュタインが作った古典的サイレント映画。

『アンタッチャブル』

子供が乗った乳母車が落下していく『戦艦ポチョムキン』の模倣。ブライアン・デ・パルマ監督作品。

『転校生』

中学生の男女が一緒に階段を転げ落ちた後に、男と女の体が入れ替わる大林宣彦監督作品。

『知りすぎている男』

悪者が階段から足を踏み外して落着する有名な結末、ヒッチコック監督作品。

時間に余裕があるとき、たまには映画を観て過ごすのもいいかもしれない。